建安年間後期の曹植の〈贈答詩〉について

龜山　朗
高知大學

後漢末の建安年間を中心とする時代は、中國の詩歌の世界が急激に擴大變化した時期として特筆されるが、その具體的な現われとして理解できるものに、贈答詩の增加がある。私は先に、建安詩人の殘した贈答詩の中から、送別に際して贈られた作品を取りあげ、それを軸にして建安文學史のひとつの脈絡を探ってみた。（「建安詩人による送別の贈答詩について」日本中國學會報・第四十一集・一九八九年。以下、前稿と記す。）ここではその續稿として、送別の作以外の建安贈答詩について考えてみる。（以下、送別の作を除くときは、題目のごとく、〈贈答詩〉と表記することにする。）なお考察の對象とすべきは曹植と劉楨の五言形式による作品であるが、それらから窺える兩詩人の行き方にはかなりの隔たりがあるようで、ひとしなみにあつかうことは困難である。本稿では劉楨の作品はひとまず措き、多彩な廣がりをみせている曹植の〈贈答詩〉に的を絞って段階的に檢討を加え、建安〈贈答詩〉の世界を把握するための見取り圖を描いてみたい。

一

送別の贈答詩と對比しながら建安〈贈答詩〉全體を眺めわたしてみて、ただちに氣付くのは、その制作時期が建安年間後半に集中しているということである。すなわち、今に傳わる〈贈答詩〉の大半は、多くの文人たちが曹操の幕下に集められ曹丕を中心にして盛んな文學的交流を始めた建安十六年（二一一）頃から、建安末年（二二〇）までのわずかの期間、とりわけ、主要な文人があいついで亡くなった建安二十二年（二一七）までの數年間に、集中的に作られており、送別の贈答詩の制作時期に極端な片寄りが認められないのとは、際立った對照を示している。このように建安

〈贈答詩〉には隆盛期があり、それがいわゆる建安文人集團による文學活動の高潮期と重なっているということは、注目すべき事實である。（本稿でも、建安十六年から建安二十五年までを、建安年間後期と呼ぶことにする。）

だが、建安文人による文學活動とは、具體的にはどのような活動であったのだろうか。いま細部は無視してその中心となっていたのが何かということに限って言えば、それは、主に曹丕によって設けられた宴集の場に加わって詩（や賦）を競作すること、さらにはそこで披露された作品を共々に鑑賞することであったとみて、大きな間違いはないと思う。それこそは建安年間後期の文人の文學的生活上の最重要事であっただろうし、宴集の場への參加は、文人としての自己をアピールする絶好の機會であったはずだ。實際、現存する建安年間後期の詩歌を見てみると、宴集の場に供するために作られたと考えられる公讌詩や題詠的な作品が、後世からの評價はともかく、量的にはきわめて大きな比重を占めているのである。(1)

となると、建安年間後期に集中している〈贈答詩〉の中に、そうした公的な宴集の場と直接的なかかわりをもつ作品があったとしても、何ら不思議ではないわけである。しかしながら、現存作品中からその例として確信をもって擧げられるのは、曹植の「贈丁儀王粲」ぐらいである。(2)（その他に、文人集團による文學活動とは言い難いものの、私的な宴集の場でうたわれたには違いない作品に、曹植「贈丁翼」があるが、それについては後で檢討する。）もっとも、宴集の場とのかかわりにおいて「贈丁儀王粲」が注目されることは、從來まったくなかったようなのだが。しかし、すこし注意して讀むと、建安年間後期の文人集團による詩歌の制作と受容のあり方を考えるうえで、なかなかに興味深い問題をはらんだ作品であることがわかる。そこでわれわれは、本稿での考察を「贈丁儀王粲」から始めることにしよう。

＊　＊　＊

1 從軍度函谷　軍に從いて函谷を度り
2 驅馬過西京　馬を驅りて西京を過る
3 山岑高無極　山岑高くして極り無く

4 涇渭揚濁清　涇渭　濁清を揚ぐ
5 壯哉帝王居　壯なるかな帝王の居
6 佳麗殊百城　佳麗なること百城に殊る
7 員闕出浮雲　員闕　浮雲より出で
8 承露槩泰清　承露　泰清に槩れり
9 皇佐揚天惠　皇佐　天惠を揚げ
10 四海無交兵　四海に兵を交す無し
11 權家雖愛勝　權家は勝を愛すと雖も
12 全國爲令名　國を全くするを令名と爲す
13 君子在末位　君子　末位に在らば
14 不能歌德聲　德聲を歌う能わず
15 丁生怨在朝　丁生　怨みて朝に在り
16 王子歡自營　王子　歡びて自ら營む
17 歡怨非貞則　歡怨は貞則に非ず
18 中和誠可經　中和　誠に經とす可し

詩は前半、曹操の西方遠征に従って長安に入城したときに眼にした壯麗な景觀をうたい、それをうけて9句から12句までは、曹操の武德を讃える。そこまでは從軍詩的である。そして13句以下において、丁儀と王粲にかかわる作者の言葉が展開される。この詩が贈答詩であると納得できるのは、したがって、最後の六句があるからである。

さてこの詩、從來それほど注目を集めてきたわけではないが、ここにうたわれている曹操の西征がいつ行なわれたものであったのかについては、若干の議論がたたかわされてきた。それは要するに、この詩を、王粲が曹操に仕えてから亡くなるまでの間に行なわれた建安十六年と二十年の二度の西征のどちらに繫けるかという議論で、現在ではほとんどの人が建安十六年説に賛同しているようである。その根據としては、たとえば次のようなことが指摘されている――建安十六年の西征には、曹植と王粲が從軍していたのは確實だが、建安二十年のときには、曹植が從軍していなかった可能性が高いので、建安二十年説は成立しにくい。／建安十六年の時點では、王粲は秩千石以下の丞相掾あるいは軍謀祭酒であったので、13「君子在末位」という表現と符合するが、建安二十年だとすでに秩二千石の侍中に昇進しているから、「在末位」とは言えない……。(3)

だがこうした議論は、指摘する事實に間違いはないのだろうが、どこかおかしい。というのは、私はこの詩について、次のような疑問を抱かざるをえないからだ。

疑問の第一は、これが二人にあてた贈答詩であるということである。そこには何か理由がなければならないと思うが、これまで滿足のいく説明はなされていない。またこの詩を二人がどのようにして受け取ったのかも問題である。

そこで參考までに、逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』によって魏晉時代のすべての贈答詩をひととおり見てみると、二人以上の相手に贈られた贈答詩が、五例だけあった。しかし、そのうちの三例は、兄弟か親戚關係にある人々に贈ったものである。たとえば嵇康には「答二郭三首」があるが、それは郭遐周・郭遐叔の兄弟それぞれから詩を贈られたのに答えたもの。その場合は兄弟は同じ場所かすぐ近くで生活していたに違いなく、二人はそろって嵇康からの詩を讀んだのであろう。そのような相手に宛名を連記して詩を贈ったからといって、特に問題になるわけではない。(4)

一方、殘りの二例は、他人どうしである二人以上の相手に贈ったものだが、それらは實は、送別の宴で披露された贈答詩である。(5) そうした詩においても、複數の相手に贈るということ自體をとりたてて問題にする必要がないことは言うまでもない。

このように、魏晉時代の受け手を複數とする贈答詩は、いずれも當然の理由があってそうなっているのである。

それに對し、「贈丁儀王粲」の場合はどうか。なるほど二人にかかわる發言と理解できる13句以下の內容から考えて、その時の二人の態度が「怨」「歡」對照的であったとはいえ、共に「貞則」に適っていなかったというところに、二人が結び付く理由があったと、いちおうは言えるかもしれない。しかし、だからといって、一緒に生活していたとは考えられない二人にあてて一篇の詩を贈るというのは、やはり不自然ではないだろうか。

疑問の第二は、いっそう重大であるように思える。それは13句以下の表現についてなのだが、贈答詩の中で相手に直接言及する際には、ふつうはこういう言い方をしないのではないだろうか。私にはこれが、丁儀・王粲に對して、露

骨で禮を缺くように思えてならないのだ。とくに13 14「君子在末位、不能歌德聲」は、もしも現在ひろく行なわれている解釋――「君たちは位が低いので、（曹操の）德を讃えることができない」――に從うなら、あまりに露骨でぶしつけだと言わねばなるまい。ちなみに曹植には別に丁儀と王粲のそれぞれに贈った詩があるが、そこにはこのような非禮な表現は見當たらない。それに、そのときの二人の地位が實際にあまり高くなかったとしても、曹操の德を讃えられなかったとはとうてい考えられない。

私は、「贈丁儀王粲」に對して、以上のような疑問を抱かざるをえない。それを解決しないままで制作時期について云々しても、あまり意味があるとは思えない。では疑問はどうすれば解決できるのか。結局のところ、13句以下六句の表現を根本的に見直すことからはじめるしかあるまい。

その際、あらためて注目されるのが、「君子在末位、不能歌德聲」に關して李善が引く『琴操』の語、「古えは君子位に在らば、役するに時を踰えず」である。これを李善は、どういう意圖をもって引いたのだろうか。『漢書』「谷永傳」には、「踰時之役」という語が見える。それは三ケ月以上の行役を意味する。とすると答は明白であろう。李善は、「然るべき位にある君子が長期間の行役に從うことを許されないのは、古くからの慣らわしである」という解釋を示すために、『琴操』を引いたに違いない。だとすると、「不能歌德聲」も、「遠征に參加して曹操の武德を讃える詩を作ることができない」という意にならなければなるまい。二句の意味するところは要するに、「君子たる兩君は末位に在るので、今回は從軍できなかった」である。「それを兩君が怨んだり歡んだりしているのは宜しくない」とつづくわけだ。

これで、丁儀と王粲がなぜ結び付いたのかという疑問については、解決の糸口が摑めたように思う。では、この詩を二人がどのようにして受け取ったのかという問題についてはどうか。

それを合理的に説明するには、この詩が曹操の催した宴席で披露されたと考えるしかないであろう。つまりこれは、丁儀と王粲が密室で個人的に讀むような性格の詩ではない

のだ。この推測は、詩の中盤に曹操の武徳を讃える表現が出てくる理由をも、あわせて説明しうるものである。

ただ、そう考えると、新たな問題が生ずる。それは、この詩が披露された宴席が、遠征先でのものなのか、それとも凱旋してから催されたものなのかという問題である。もし後者であれば、丁儀と王粲は宴に加わっていて、曹植からこの詩を贈られたという可能性が出てくる。しかし前者であったとすると、詩を贈られる當人がその場に居ないということになる（二人は遠征に参加していなかったわけだから）。その點についてはどう判斷すればよいのだろうか。

だがそのことはしばらく措いて、先に丁儀・王粲に對して禮を缺くと思われる表現の方から考えてみよう。

そもそも、二人に對して非禮だと言えるのはなぜか。それはわれわれが、はなから、これは二人に贈った詩であるとする前提に立ったからに他ならない。だからわれわれは、その前提をいったん放棄してみよう。すると次のような考え方ができるのではないか。

――この詩は、（遠征中か凱旋後に）曹操が催した宴席で、遠征に加われなかった丁儀・王粲二人のことが話題となった際に、「二人に贈る」というテーマで、二人と親しい曹植が作ったものである。したがってこの詩においては、丁儀・王粲は名目上の享受者にすぎず、重要なのは詩の第一の鑑賞者である曹操、次いで曹操を取り卷く宴の參加者たちの存在である。

これは突飛な思いつきだろうか。しかしこう考えると、これまでの疑問は一擧に氷解してしまうのではないか。すなわち、「末位」というのは、曹操の前で二人に關して發言する際に用いる言葉としては、まことに相應しいものである。（そのときの二人が實際には「末位」に居なかったとしても少しも不都合でないことは言うまでもない。）「怨」「歡」は、誇張と取りたい。とすると、それを「貞則に非ず」と決めつけたのも、生眞面目に二人の態度をたしなめているのではなくて、宴を盛り上げるための一種のユーモアであったとも理解できるのではないだろうか。

また、このように考えると、宴席に丁儀と王粲が加わっていたかどうかというさきほどの問題も、自動的に解消し

てしまうであろう。名目上の受け手であれば、詩が披露された場所に居ても居なくても、どちらでもよくなるからである。（ただし、二人がその場に同席している方が、場面としては面白いと思うが。）[6]

さらに言えば、前半十二句が從軍詩的であって、丁儀・王粲二人に聽かせるという體裁をとってはいるものの明らかに曹操の武功をことほぐことに主眼をおいた表現になっているのも、こうした見方をとるならば、少しも不自然ではなくなるのである。

＊　＊　＊

「贈丁儀王粲」でうたわれている西征が、建安十六年と二十年のいずれであったのかは、本稿においてはさほど大きな關心事ではない。が、われわれの到達した見地からすれば、建安十六年に繫けるのはむつかしくなった。というのは、その時の遠征に王粲が終始加わっていたのは、疑う餘地のない事實だからだ（丁儀については不明）。したがって、現在の通說とは逆に、建安二十年の西征と關係している可能性が高くなってきたわけだが（ちなみに建安二十年說を唱えたのは李善である）、もしそうだとすると、私にはちょっと氣にかかる作品がある。それは建安二十年の西征を終了した曹操が、翌二十一年春、鄴に凱旋、そのときの宴席で披露されたと考えられている、王粲の「從軍詩其一」である。少し長いが、全篇を引こう。

1 從軍有苦樂　軍に從うに苦と樂と有れば
2 但問所從誰　但だ問う　從う所は誰ぞと
3 所從神且武　從う所　神にして且つ武ならば
4 焉得久勞師　焉んぞ久しく師を勞するを得ん
5 相公征關右　相公　關右を征し
6 赫怒震天威　赫怒して天威を震う
7 一舉滅獯虜　一舉して獯虜を滅ぼし
8 再舉服羌夷　再舉して羌夷を服す
9 西收邊地賊　西のかた邊地の賊を收むるは
10 忽若俯拾遺　忽(すみや)かなること俯して遺ちたるを拾うが若し
11 陳賞越丘山　賞を陳ぬること丘山を越え

12酒肉踰川坻　酒肉　川坻を踰ゆ
13軍中多飫饒　軍中には飫饒多く
14人馬皆溢肥　人馬　皆溢肥たり
15徒行兼乘還　徒行は乘を兼ねて還り
16空出有餘資　空しく出づるも餘資有り
17拓地三千里　地を拓くこと三千里
18往返速若飛　往返　速きこと飛ぶが若し
19歌舞入鄴城　歌舞して鄴城に入り
20所願獲無違　願う所　獲て違う無し
21盡日處大朝　盡日　大朝に處り
22日暮薄言歸　日暮れて薄か言に歸る
23外參時明政　外は時の明政に參じ
24內不廢家私　內は家の私を廢らず
25禽獸憚爲犧　禽獸　犧と爲るを憚るも
26良苗實已輝　良苗　實に已に輝けり
27竊慕負鼎翁　竊かに負鼎の翁を慕い
28願厲朽鈍姿　願くは朽鈍の姿を厲さん
29不能效沮溺　沮溺に效いて
30相隨把鋤犁　相隨いて鋤犁を把る能わず
31孰覽夫子詩　孰夫子の詩を覽るに
32信知所言非　信に言う所の非なるを知る

詩は冒頭より、過剰なまでの美辭を弄して、今次の戰の速やかにして大いなる勝利をことほぎ、勝利によって味方にもたらされたかずかずの利益を數え上げる（18句まで）。かくして軍は華々しく鄴城に凱旋したというわけだが（19 20句）、21～26句はわかりにくい。20句までが建安二十年の西征に關する內容に限定されていたのに對し、ここでは曹操の平生の生活ぶりに觸れたものと、いちおう理解しておきたい。ともあれそのあたりまでは、曹操を讃えることに作者の精力が注がれていると言えよう。ところが終わりの六句になると、作者自身の官界への參加の意志が、やや唐突に表明される。そこのところがこの詩では問題になるのだが、全體的に見れば、凱旋を祝う宴席に供された詩として理解するのに、さほどの困難はないと思う。

ところで氣にかかるというのは、この「從軍詩其一」は、詩の大部分を費やして曹操の武德を讃えたうえで最後に作

者の考えを表明するという構成においても、また詩が披露された場の性格においても、「贈丁儀王粲」と驚くほど接近しているように思われるからである。（「贈丁儀王粲」が從軍詩的性格を有していることはすでに述べた。）しかも「贈丁儀王粲」がうたっているのも、同じ建安二十年の西征である可能性が高くなってきたのである。

また、伊藤正文氏が言われるように、「從軍詩其一」が實は作者の從軍體驗をうたった詩ではないということにも注意しておく必要がある。[7] そうした詩の終結部で、作者の官界への參加の意志が表明されるわけだが、そもそも凱旋を祝う詩において、しかも作品の中では最も重要なはずの終結部で、なぜ、作者個人にかかわる問題をもち出す必要があったのだろうか。加えて、典故を使ったそのうたいぶり――明らかにそこでは發言に力がこめられているのだ――も大いに氣になる。私にはこれが、作者の日頃の主張を、凱旋祝いにことよせて披瀝したものとは、どうしても考えられない。そうした種類の發言ではなくて、それを言わざるをえない特定の狀況のもとで發せられた言葉、つまり、宴の進行という一定の文脈の中で、誰か特定の相手に向けて投げ返された言葉であるように思えてならないのだ。

もちろん、「從軍詩其一」が披露されるに至る宴の進行具合を窺うに足る資料は、殘ってはいない。だから、これはあくまでもひとつの假說として言うのだが、「從軍詩其一」の終結部と「贈丁儀王粲」の終結部とを結びつけてみるというのは、どうだろうか。（ということは、「贈丁儀王粲」も、遠征先の宴席でではなしに、凱旋してからの宴席でうたわれたと考えるわけだが、それは實は黃節の意見であった。[8] そしてそう考えると、建安二十年の西征に曹植が從軍していなかったことを示唆する資料と齟齬をきたさなくなる。）

われわれは次のような場面を想像することができるであろう。

西方遠征からの凱旋を祝う宴席で、たまたま話題が、從軍できなかった丁儀と王粲の二人に集中した。それをうけて曹植は「贈丁儀王粲」を作り、曹操の前で披露したが、その中で「君子在末位、不能歌德聲。丁生怨在朝、王子歡自營。歡怨非貞則、中和誠可經」とうたった。その同じ宴

席で、王粲も「從軍詩其一」を作って曹操の凱旋を祝ったが、あわせて曹植の「王子歡自營」――王君は公事から解放されたのを歡んでいる――という發言に對する辯明を試みた。「私がひそかに慕っているのは、殷の湯王のもとに赴いて王道を實現せしめた伊尹の生き方であります。私もわずかの餘命を世のためにささげたいと願っているのです。長沮・桀溺のまねをして隱遁生活をすることは私にはできません。隱遁生活に心が傾斜することがないではありませんが、そうした氣持をうたった夫子の詩をよくよく讀んでみて、私はやはり、そこで夫子が言っているのは間違いだと確信いたしました。」

自分を殷の開國の名相伊尹と引き比べるのをはじめとして、「從軍詩其一」の終結部での王粲の表現はいかにも大袈裟であるが、これも「贈丁儀王粲」の誇張した表現に、誇張でもって切り返したと考えれば、つじつまが合うのではないだろうか。

ことわっておくが、私はここでなにがなんでも、「贈丁儀王粲」と「從軍詩其一」とが同時の作であると主張したいわけではない。それは先にも述べたように、可能性がないとは言えないという程度の假説にとどまる。重要なのは、「贈丁儀王粲」（と「從軍詩其一」）というのは、それの披露された宴集の場に戻してみてはじめてそのおもしろさが見えてくるような種類の詩であるということだ。假説を立てることによってそれを確認してみたかったのである。

だがそれを裏返せば、兩詩は言語作品として充分に自立していないというふうにも言えよう。つまり詩を、それがうたわれた宴集の場と切り離して、文字のみで讀んだのでは、當然わかりにくさが生じるのだ。その點、陳祚明が「贈丁儀王粲」について、「此の首、意晦くして佳致無し。怨在朝・歡自營は何れの語を作すやを知らず。以うに文選に收めらるる所は、且く結構の亦格を成すが故に刪らざるなり」（『采菽堂古詩選』卷六）と、はなはだ手嚴しい評價を下しているのや、私の目に觸れた限りで言えば近年發行の漢魏詩の選集の中に「贈丁儀王粲」が採られていないのは、故なしとしない。「從軍詩其一」についても、王粲の實體

驗をうたった「從軍詩其二～其五」にくらべると評價が低いように思われる。が、そうした評價が實は、文字を最大のよりどころにして詩歌を鑑賞するという、後世に出來た鑑賞法によって下されたものであるということは、あらためて確認しておく必要がある。もしもそれがうたわれた宴集の場を再現できたとしたら、それに對する評價が一變する可能性は決して小さくはない。「贈丁儀王粲」は、そうした種類の贈答詩なのだ。いや、形式は贈答詩だが、實質的には、贈り手と受け手とを結びつけるという贈答詩本來のあり方からはすでに大きく逸脱しているわけで、むしろ公讌詩の一變種というほうが相應しいかもしれない。

建安年間後期というのは、こうしたある意味では奇妙な贈答詩が生みだされた時代でもあった。宴集の場において繰り廣げられた建安文人集團の文學活動の力學は、贈答詩をもその圏内に取り込んで、それを變形させてしまうことすらあったわけだ。

*　*　*

曹植の「贈丁儀王粲」は、贈答詩としては特殊な例であった。だが、考えてみれば、宴集の場において〈贈答詩〉を披露するということ自體、ある程度の特殊性をまぬがれることはできないのではないだろうか。なぜなら、誰かを送別するといったような共通の目的をもって設けられた宴席においてならばともかく（實際、前稿でみたように、建安詩人の送別の贈答詩は、その大部分が送別の宴において公表されたものであった）、さまざまな文人たちの集った宴席で、個人と個人の間でのやりとりを基本にする〈贈答詩〉が披露されるためには、そのこと自體が何らかの點で共通の關心事でなければならなかっただろうから。「贈丁儀王粲」の場合は、まさに宴の參加者全員の興味をそそる、曹植から丁儀・王粲への仕組まれた「贈詩」であったわけだ。

が、それにしても、「贈丁儀王粲」が、贈り手と受け手を結び付けるという贈答詩本來の機能を二の次にした作品であることは、見てきたとおりである。だが、「贈丁儀王粲」のような例以外に、宴集の場と關係をもつ〈贈答詩〉が、建安年間後期には無かったのだろうか。たとえば、應

場の「侍五官中郎將建章臺集詩」（『文選』では公讌に分類）には次のような詩句がみえるのだが、それはどう理解すればよいのだろうか。

19公子敬愛客　公子　客を敬愛し
20樂飲不知疲　樂飲して疲るるを知らず
21和顏既以暢　和顏既にして以て暢べ
22乃肯顧細微　乃ち肯て細微を顧みる
23贈詩見存慰　詩を贈りて存慰せらるるも
24小子非所宜　小子の宜しき所に非ず
25爲且極歡情　爲に且く歡情を極め
26不醉其無歸　醉わずんば其れ歸ること無けん
27凡百敬爾位　凡百　爾の位を敬しみ
28以副飢渴懷　以て飢渴の懷に副わん

これはあるいは、宴席において應場が宴の主催者である曹丕から詩を贈られたことを、うたったものかもしれない。もっとも、曹植「公讌詩」には、「公子敬愛客、終宴不知疲」という、應場の詩とほとんど同一の詩句が見えるし、また王粲「公讌詩」にも、「常聞詩人語、不醉且無歸。今日不極懽、含情欲待誰。見眷良不翅、守分豈能違」とある。これは應場詩の25～28句と相通じる表現であるように感じられる。してみると、この詩は曹植と王粲の「公讌詩」と同時の作であった可能性は高いと見なければなるまい。さらにまた、曹植の「公讌詩」が劉楨の「公讌詩」および曹丕の「芙蓉池作」と深く關係しているということは大方の指摘するところでもある。ところで、それらの詩を讀んだ限りでは、曹丕の催した宴席において、曹丕が應場一人に個人的に詩を贈るというようなことがあったとは、ちょっと考えにくい。したがって、ここでの「贈詩見存慰」というのは、曹丕がその場の文人たち全體に向って自作を提示したのをとりあげて言った儀禮的な表現と理解しておくのが穩當ではなかろうか。(9)

結局のところ、建安年間後期の公的な宴集の場において〈贈答詩〉がその本來の機能を發揮する機會は、ほとんど無かったと言ってよいと思う。しかしながら、それが私的な宴集の場であれば、事情は自ら異なってくる。そして、そうした場での作と考えられるのが、次に擧げる曹植の

「贈丁翼」である。

1 嘉賓塡城闕　嘉賓　城闕に塡ち
2 豐膳出中廚　豐膳　中廚より出づ
3 吾與二三子　吾と二三子と
4 曲宴此城隅　此の城隅に曲宴す
5 秦箏發西氣　秦箏　西氣を發し
6 齊瑟揚東謳　齊瑟　東謳を揚ぐ
7 肴來不虛歸　肴來れば虛しく歸さず
8 醵至反無餘　醵至れば反すに餘り無し
9 我豈狎異人　我　豈に異人に狎れんや
10 朋友與我俱　朋友　我と俱にあり
11 大國多良材　大國には良材多し
12 譬海出明珠　譬えば海の明珠を出すがごとし
13 君子義休偕　君子は義休く偕り
14 小人德無儲　小人は德儲うる無し
15 積善有餘慶　善を積めば餘慶有り
16 榮枯立可須　榮枯　立ちどころに須つ可し
17 滔蕩固大節　滔蕩たるは固に大節なるも
18 世俗多所拘　世俗は拘る所多し
19 君子通大道　君子は大道に通ず
20 無願爲世儒　世儒と爲るを願う無かれ

あまたの賓客を招いての盛大な宴が開かれているその傍らで、氣心のしれたわずかの友人だけのささやかな宴席が設けられる。小宴はおおいに盛り上がり、人々は存分に飲みかつ食らう……。以上、8句までは、その場のありさまを、感情を抑えた淡々とした筆致で描いている。表現に特に凝ったところはなく、「秦箏」「齊瑟」の對など、當時の詩歌にしばしば見られる常套的發想をそのまま使用したものである。それはこの詩が宴席での卽興の作であることを示しているのかもしれない。しかし、9句以降、丁翼に贈る言葉がはじまると、詩は俄然緊迫感をただよわせはじめる。曰く、「異人」「小人」「世俗」「世儒」。それらと決して相容れることのないのが、この場に集った自分たち、なかんずく丁翼なのだ……。ここには仲間以外の者を排除する鋭い刺が含まれていよう。

さてこのように後半の內容を理解した上で、もう一度前

半を振り返ってみると、一見淡々とした表現の背後に、ある異様さを讀みとれないでもない。そもそも、衆人から離れて、わずかの仲間だけで「曲宴」を催すというのが、尋常でない。出てくる肉や酒をすべて平らげるという行動も、その場に集った者たちの穏やかならざる氣持の現われではないか。とすると、宴にはつきものの「秦箏」「齊瑟」の調べも、ここではむしろ悲壯な感情を掻き立てるものであったかもしれない。

いずれにしてもこの詩は、丁翼を圍んで、ある感情――私はそれを疎外された者の感情であろうと推測したわけだ――を共有する、ごく少數の選ばれた仲間たちだけとの宴集の場でうたわれたものであったはずだ。そして、宴が進行するにつれて盛り上がる異様な雰圍氣に增幅されつつ、丁翼とその仲間たちによって享受されたのであろう。そこでは「贈丁翼」は、贈り手と受け手を結び付けるという贈答詩本來の機能を存分に發揮していると言える。そうしたことを、後世の讀者は、「贈丁翼」という作品から讀み取ることができるのである。[10]

このように、「贈丁翼」を生みだした宴集の場が、建安文人の文學活動の主要な場としてのそれと較べてきわめて特異なものであったということは、建安年間後期の〈贈答詩〉を考えるうえで無視できない問題を含んでいると思うのである。

二

以上、宴集の場とかかわりをもつ〈贈答詩〉を見てきた。當り前といえば當り前なのだが、建安年間後期の〈贈答詩〉の隆盛期と、宴集の場を舞臺とする文人集團による文學活動の高潮期とが重なっていることは、ただちに兩者の直接的な結び付きを意味するのではなかった。結び付くとしたら、それはごく特別な場合に限られていた。宴集の場に〈贈答詩〉はやはり不向きだったのである。

そして實際、文學史的に畫期的な意義を有する建安年間後期の〈贈答詩〉というのは、文人たちの宴集の場に供されることを前提としない、あくまでも個人と個人の間のやりとりであることを基本とする、曹植（と劉楨）のいくつか

の作品なのである。

それも普通に考えれば、個人間でのやりとりである方が贈答詩には似つかわしいという、ごく當り前の理由によると、いちおうは言えるであろう。しかし、それならなぜ、建安文人集團が形成されてから後に、そうした〈贈答詩〉に畫期的な作品が生み出されたのか。というのも、前稿で述べたように、建安贈答詩隆盛の兆しは、文人集團が形成される以前から、送別の作によってすでに顯われているからである。ならばもっと早くから、個人間のやりとりとしての〈贈答詩〉の制作が盛んになっていてもおかしくないではないか。

建安年間後期の〈贈答詩〉の隆盛と文人集團の成立とは、やはりどこかで關係していると見なければなるまい。その關係の實相を見極めることは、個人間のやりとりとしての〈贈答詩〉の畫期性を正しく理解するためにも、必要な手續きであろう。

その手掛かりを得るためにここでしばらく、建安時代における詩歌の受容形態がどのような狀態にあったのかという問題に目を向けてみようと思う。

はじめに一般論から言えば、詩歌は當初はすべて、音樂とともに歌われたにせよ大聲で朗誦されたにせよ、ともかくたくさんの人々によって同時に受容されていたはずである。そこにいつの頃からか、集團を離れて個人で讀むという受容形態が出現し、「密室での默讀」ということすら行なわれるようになる。これは文學の根本にかかわる重大な變化と言わねばならない。

さてそれでは、建安時代はどのような段階にあったかといえば、現存する作品によって判斷する限り、基本的には、詩歌は多くの人々とともに鑑賞すべきものとする、集團的受容の段階に留まっていたと考えざるをえない。[11] より正確には、集團的受容の最終的段階にあったと言うべきか。というのは、その頃には署名のある詩歌の急激な增加が見られるのであって、それは制作者の側で、無記名性を特徵とする詩歌史の初期的段階から、個人による創作の段階への進展があったことを示しているのに他ならず、そうした制

作者の側の顯著な變化は、必然的に、受容形態の變化をも促さざるをえなかったと推測されるからだ。[12]

そのような狀況のもとにおいて建安文人集團が成立したわけだが、その主要な活動の場が宴席であったことから分かるとおり、それは詩歌の受容形態の根本的な變化を促進するものではなかった。むしろ逆に從來からの受容の形態を守りつつ、しかも從來とは比較にならないほど洗練された受容の場を現出せしめたのである。その結果として、文人たちには創作上の明確な指針が與えられるようになったであろう。しかしそれは同時に、詩歌制作における規範性の强化を意味したはずである。かくしてそこからはやがて曹丕によって、「詩賦欲麗」(『典論』「論文」)なるテーゼが提唱されることになるであろう。

したがって、建安文人集團の成立によって引き起こされた文學史上の變化は、どちらかといえば、過去の總決算としての意味あいが强かったと見なければならない。具體的には、文人集團の成立によって、集團的に受容される詩歌に、一定の成熟がもたらされたと思われる。が、それは一方では、舊來の傳統に對する根本的な變革を待望する氣運をますます醸成していたのではないだろうか。

そうしたところに、集團を離れて個人として讀まれるべき〈贈答詩〉の制作が盛んになりつつあったのだが、そのこと自體が實はきわめて革新的な意義を有していたことは、以上の考察により明かであろう。曹植(と劉楨)の〈贈答詩〉が畫期的である理由も、基本的には、それらが新しい受容形態に屬する作品であった點に求められねばならないのである。

建安後期の〈贈答詩〉の隆盛は、したがって、文人集團の成立が推進した詩歌作品の規格化に對する一種の反發という意味あいを一方にもっていたとも理解できるであろう。だがそれにしても、なぜ〈贈答詩〉でなければならなかったのか。つまり、舊來の行き方にあきたらない詩人は、いかなる理由で〈贈答詩〉というスタイルを選びとったのだろうか。

それはおそらくは、〈贈答詩〉においては、個人によって讀まれるという受容の形態をとる作品を作ろうとする者

が直面しなければならない困難さ、つまり文字のみによって讀者を繫ぎとめねばならないという困難さが、大幅に輕減されるからである。〈贈答詩〉の讀者というのは、作者との關係がすでに確立している特定の個人であるから、作品を受け容れるための充分な下地があらかじめ出來ているのだ。それはたとえば、多くの現代の作家がそうであるように、摑みどころのない不特定の個人を讀者として作品を作るのとは、その困難度において、まさに雲泥の差があるわけである。

したがって、個人間のやりとりとしての〈贈答詩〉は、新しい受容形態による作品を希求する段階に至っていた建安年間後期の詩人が必然的に行き着いた詩歌スタイルとして、建安年間後期の詩歌界を押し廣げた公讌詩をはじめとする文人集團による文學活動と直結した作品群とは區別して考えなければなるまい。さらに言えば、次の晉代における〈贈答詩〉の壓倒的な重要さも、その方向から說明できるかもしれない。

が、それにしても、建安年間後期の詩人が從來にはなかった困難さと向き合っていたことにかわりはない。それを彼らはどのようにして克服し、それによってどのような新しい詩歌文學の地平を切り拓いたのか。曹植の實踐例を、次に見ることにしよう。

三

建安年間後期の曹植の〈贈答詩〉の中で、文人たちの宴集の場と切り離して讀めそうな作品としては、「贈徐幹」「贈丁儀」「贈王粲」の三首がある。そのうちで最も重要なのは、何といっても「贈徐幹」である。「贈丁儀」は、後に見るように、「贈徐幹」とはいささかレベルを異にする。「贈王粲」は、王粲の「雜詩」（日暮遊西園）に觸發されて作られたと考えられ、王粲「雜詩」の發想と構成と措辭に合わせて作詩するというルールを自らに課した、一種の言語ゲームとみなすことも可能で、その點むしろ文人集團の中で競作された作品と近いところがある。それは唱和詩のごく初期の例とも理解され、決して輕視できるものではないのだが、その制作と受容の具體的狀況を推測するための資料に

缺けるので、ここでは問題點の指摘に留める。

この節では、「贈徐幹」を中心に、實際の表現に卽して、曹植が創出した新しさを檢證してみたい。

はじめに「贈徐幹」を、五段に區切って讀んでみよう。

1驚風飄白日　驚風　白日を飄えし
2忽然歸西山　忽然として西山に歸る
3圓景光未滿　圓景　光未だ滿たず
4衆星粲以繁　衆星　粲として以て繁し

第一段。自分たちが今どのような時代に生きているのかに對する作者の認識が、比興性の高い敍景表現によって示される。ここに描かれるダイナミックな天體の運行のさまは、具體的な事實との對應については議論はあろうが、基本的には、いまやひとつの時代が終焉に向かいつつあること、しかし來たるべき次の時代はなお不確實な狀態のままにあることを言わんとしたものと思う。

5志士營世業　志士　世業を營み
6小人亦不閑　小人も亦た閑ならず
7聊且夜行遊　聊且(しばら)く夜行きて遊び
8遊彼雙闕間　彼の雙闕の間に遊ぶ
9文昌鬱雲興　文昌　鬱として雲のごとく興り
10迎風高中天　迎風　中天に高し
11春鳩鳴飛棟　春鳩　飛棟に鳴き
12流猋激櫺軒　流猋　櫺軒に激し

第二段。このような時代に生まれあわせた「志士」は、それぞれが重要な職務にいそしんでいる。自分も安閑としてはおれず、夜の鄴都にさまよい出てみたが、そこで眼にしたのは、天空に向かって上昇していくかのごとき建築物と、そこに鳴き交わす鳥、吹きすさぶ風という、躍動感溢れる情景(シーン)であった。

こうした情景をもちだすことによって作者は、現在が、自分たち男子にとっていやがうえでも功名心を搔き立てられるような時代であるということを、徐幹に訴えようとしたのであろう。なお 5「志士營世業」は、徐幹が『中論』を執筆していることを言うとする說もあるが、私はここではまだ、「志士」を徐幹一人に特定しなくてもよいと思う。

『中論』執筆のことは、第18句に出てくる。

13顧念蓬室士　顧みて蓬室の士を念うに
14貧賤誠足憐　貧賤　誠に憐むに足る
15薇藿弗充虛　薇藿　虛を充たさず
16皮褐猶不全　皮褐　猶お全からず
17忼慨有悲心　忼慨して悲心有り
18興文自成篇　文を興して自ら篇を成す

第三段。ここで作者はようやく、視線を詩の受け手である徐幹に絞り、政治社會の表舞臺から身を引いて、貧窮のなかで、ひたすら『中論』の完成に情熱を傾けているその生活ぶりを、深い同情の念いをこめて描く。

19寶棄怨何人　寶棄てらるるも何人をか怨まん
20和氏有其愆　和氏　其の愆有り
21彈冠俟知己　冠を彈きて知己を俟たば
22知己誰不然　知己　誰か然らざらん

第四段。詩の中核となる部分である。典故を用いた獨特の表現は難解だが、ここに作者の徐幹に對するメッセージ——後で詳しく檢討するが、私は基本的には、徐幹に對して出仕を促したものとする朱緒曾の說に贊同する——が表明されているのは確かである。第一・二・三段は、要するに、これを言うための前置きであったわけだ。

23良田無晩歲　良田には晩歲無く
24膏澤多豐年　膏澤には豐年多し
25亮懷瑰璠美　亮に瑰璠の美を懷けば
26積久德逾宣　積むこと久しくして德逾よ宣かならん
27親交義在敦　親交　義敦きに在り
28申章復何言　章を申ねて復た何をか言わん

第五段。諺語的表現によって、自らの意見に普遍性の裝いをよそおわせ、前段の徐幹へのメッセージを補强する。そして最後は、むしろ平凡な激勵のことばで、靜かに詩を閉じる。

同じ作者の「贈丁儀王粲」「贈丁翼」を讀んできたわれわれにとって、この詩のもつ重厚さを理解するのは容易いと思う。堅牢このうえない構成のうえに、深い意味の込められた詩句が連なり、讀者の前には確固たる作品世界が提示されるのである。これは、かけがえのない相手に對する、

腰を据えた眞劍な説得である。

讀者（徐幹）にとってみれば、これは、熟讀を要する詩と言えよう。とりわけ、この詩の關鍵をなす、第四段の典故を用いた表現には、最大の注意を拂わねばならないであろう。以下、その點について、少し詳しく考えてみよう。

まず、第四段をどう解釋するかについて。

19 20「寶棄怨何人、和氏有其愆」は、言うまでもなく、和氏が楚王に玉の原石を獻上したのに、王を欺く行爲として二度までも刖刑に處せられ、三度目にしてやっと玉であることを認められたという、『韓非子』「和氏」等に見られるおなじみの故事を用いたものである。この故事を用いること自體は、同時期の詩文にもかなりの例があり、典故としては平凡な部類に屬したであろう。しかし問題は、その用いられかたである。というのは、この故事においては、和氏は普通は、その信念を賞賛される側であって、假にも「愆あり」とされるようなことはないからである。もしも「愆あり」と言うのであれば、それはむしろ寶玉であることをすぐに見拔けなかった楚王に對してであろう。ところがここでは、「寶が見棄てられても誰も怨むわけにはいかない。その罪は和氏自身にあるのだから」と言うのである。これは讀者（徐幹）への謎かけ以外の何ものでもない。ではそれはどう解けるだろうか。

余冠英氏は、次のように解いた――ここでは作者は、自らを和氏に、徐幹を寶玉に比している。「君が不遇であるのは、君自身の責任ではなくて、君を推擧しおおせるだけの力がない私に責任があるのだ」、作者はそう言って徐幹を慰めているのである、と。[13]

だがこれでは、楚王が曹操と重なることになって、都合が惡いのではないか。つまり、和氏（曹植）の力不足とはいえ、寶玉（徐幹）が見棄てられている根本の責任は、楚王（曹操）の不明に歸せられることになるのだから。それに、その頃の徐幹が現實の政治の舞臺から距離をおいて著作に沒頭していたのは、實は徐幹自身の選擇であった。[14] おそらくは本人の肉體的條件も關係していたに違いない。[15] 肉體の衰えは、徐幹に、現實社會に出て活動する氣力を失わせつつあったのではないかと推測されるのである。

こうした點からみて私は、「寶棄」二句は徐幹に出仕を促したものだとする朱緒曾の說にくみするのである。[16] ただその際、それが强引な催促ではなくて、氣弱になっている友人の氣持を奮い立たせることに主眼があったであろうことは、ぜひとも補足しておかねばならない。二句を嚙みくだいて解釋すれば、およそ次のようになるであろう。

「もしも寶が見棄てられたままでおわっていたとしたら、そのとがは、寶であることを認めさせるまでの努力をつづけなかった和氏に歸せられるべきだと、私は考える。同じように、もしも君のように優れた人材が、このまま埋もれてしまうようなことになったとしたら、その責任は君自身にあると言わねばならないであろう。しかし實際は、和氏は、刖(あしき)りの刑を被ったにもかかわらず、ついに初志を貫徹したではないか。君もどうかいまいちど氣力を奮い起こして、こうした時代に生まれた士人の務めを果たしてほしい。」

2122「彈冠俟知己、知己誰不然」も、もとになった故事自體はポピュラーなものだが、それによって作者が何を傳えようとしたかは、いっそう難解である。ただ、余冠英氏が「知己誰不然」を、「私（曹植）自身も見棄てられた寶玉に等しく、君同樣に、知己の推挽を待つ境遇にあるのだ」として、2122句を、前二句の內容を承けての、作者の徐幹に對する辯明と解しているのは、この詩が書かれたであろう時期(『中論』序によれば、徐幹は建安二十三年二月に卒したという)[17]の曹植の實際上の地位からして苦しい。やはり朱緒曾の「苟しくも冠を彈いて以て知己を俟たば、則ち誰か知己に非ざる者ならんや」という說に從って、「君が出仕する氣になりさえすれば、友人は皆君を引き立てるだろう」という方向にとっておきたい。

さて、詩歌の中で典故を使用すること自體は、建安詩人にとってはすでに特別なことではなくなっているが、「贈徐幹」におけるこのような典故の使用法は、當時の一般的なレベルからは掛け離れたものであったと言わざるをえない。なぜなら當時の一般的な典故の使用法とは、たとえば前出の王粲「從軍詩其一」で、作者の主張を展開した部分

「竊慕負鼎翁、願厲朽鈍姿。不能效沮溺、相隨把鋤犁。孰覽夫子詩、信知所言非」に示されるようなレベルにあったと考えられるからだ。そこでの典故の使用とは要するに、人々の間にすでに廣く共有されている古典の表現や故事を讀者（聽き手）に思い出させ、それと作者自身の主張とをダブらせることによって、發言をより明快かつ確實なものにすることを目的とする修辭法だと言えるであろう。つまり、作者の個別性と繋がる主張が、それによって類型化され一般化されるのである。その意味で、『文心雕龍』「事類篇」に見られる「事に據って以て義を類し、古を援いて以て今を證する者」という規定は、典故使用の原則的なあり方を的確にとらえたものと思われる。（ついでに言えば、「事類篇」において劉勰は、そうした當初の正しい〔と劉勰が考える〕原則からしだいに逸脱していく狀況を歎いてもいるのだが、その逸脱の早い例として曹植の書簡文を擧げているのは、興味深いところである。[18]）

大切なのは、「思い出させる」ということである。教えられるよりも思い出させられる方が、人間にとってははるかに快い經驗である。自らの見解を直に提示するのではなくて、すでに享受者が所有している知識を享受者に思い出させ、それに關連付けさせる。そこでは、思い出させることができれば、作者の意圖はほとんど完成されたのも同然なのだ。

しかしながら、「贈徐幹」の典故の使用は、「思い出させる表現」のレベルを超えていると言わねばならない。そこでは、思い出させるのは、あくまでも發端にすぎない。讀者は思い出したことを反芻しながら、現在について思考をめぐらすことを要請されるのだ。だからそこでは、作者の主張はむしろ分かりにくくなっている。そうしたいわばひねった典故の使用法は、曹植の創出した技法と言ってよいのではなかろうか。[19] だがそれが「贈徐幹」に現われているということは、どう理解すればよいのだろうか。

それを明らかにするためには、ここで少しもとに戻って、「思い出させる表現」というのが實は、集團的に受容される詩歌においてこそ、基本的に求められるものであるということを確認しておく必要があると思う。

たとえば、『詩經』や漢代の樂府・古詩を想い起せばよい。そこでうたわれている事柄の大部分が、作品を受容する人々に共通の認識や感情であることは、説明を要しないであろう。歌い手の役割は、人々にそれを思い出させ、再確認させることにあるのだ。

それが建安時代の詩歌においてもあまり變っていないということは、前出の曹操の西征をことほぐ「贈丁儀王粲」や「從軍詩其一」の例、あるいはごく限られた仲間たちが共有する感情をうたっている「贈丁翼」の例からもうなづけるであろう。それは當時の詩歌の受容形態からしても、きわめて當然のことと言えよう。また、建安詩人たちが、樂府や古詩に見えるパターン化された表現を、われわれから見れば不必要と思われるくらい盛んに用いているのも、彼らの詩が基本的には「思い出させる表現」のレベルにあったからではなかろうか。

とはいえ、建安時代の詩歌が、特定の個人の名において作られるという一點において、從來の水準から大きく一歩を踏み出したことも事實だ。その當然の結果として、作者個人にかかわる言説を作品に盛り込みたいという意欲が高まっていたであろうことは、充分に予測される。だが一方、受容形態は依然として變らないのだから、「思い出させる表現」のレベルを大きく逸脱することもできない。そのような狀況において、個人的言説を詩に盛り込む手段として、「思い出させる表現」である典故使用の技法を用いることは、まことに有效であったに違いない。

ちなみに、署名のある詩歌の增加と典故使用の增加には、明らかに對應關係が認められる。さらにまた、建安時代の詩歌の中で典故が使用されるのは、〈言志〉的部分においてであるのが普通である。その點からすれば、典故の使用は、當時においては、個人的言説を公の場に提出するために必要なひとつの手續であったとも理解できる。

ただし、そうした「思い出させる表現」としての典故使用の技法は、集團的に受容される詩歌だけで用いられているのではなくて、個人として受容されたとみなされる〈贈答詩〉にも見出せるということは、ことわっておかねばならない。その例として擧げられるのが曹植の「贈丁儀」で

あるが、それは理論的には「贈徐幹」が生まれる一歩手前の段階に位置付けられる作品とも考えられるので、簡單に見ておきたい。

1 初秋涼氣發　初秋　涼氣發し
2 庭樹微銷落　庭樹　微(ようや)く銷落す
3 凝霜依玉除　凝霜　玉除に依り
4 清風飄飛閣　清風　飛閣に飄える
5 朝雲不歸山　朝雲　山に歸らず
6 霖雨成川澤　霖雨　川澤を成す
7 黍稷委疇隴　黍稷　疇隴に委てられ
8 農夫安所獲　農夫　安んぞ獲る所あらん
9 在貴多忘賤　貴に在りては多く賤を忘れ
10 爲恩誰能博　恩を爲すこと誰か能く博からん
11 狐白足禦冬　狐白は冬を禦ぐに足るも
12 焉念無衣客　焉んぞ無衣の客を念わん
13 思慕延陵子　延陵子を思慕す
14 寶劍非所惜　寶劍は惜しむ所に非ず
15 子其寧爾心　子　其れ爾の心を寧んぜよ
16 親交義不薄　親交　義薄からず

これは一見したところ、「贈徐幹」とかなりよく似ているようにも見える。すなわち、前半八句は、自然の情景を描くことにより、險惡さを呈しはじめた周圍の情勢に對する曹植の不安をも暗示しているように思われる。また9～12句も、諺語的表現に託して、何者かへの非難の氣持を表明したものであろう。それを踏まえて、13 14句で、丁儀へのメッセージが、延陵の季札の故事を用いて提示され、最後は、「贈徐幹」のときとほぼ同樣の受け手への慰めの言葉で閉じられるのである。

しかし、「贈丁儀」はやはり、「贈徐幹」とはレベルを異にする作品と言わねばならない。そのことは詩の冒頭からしてすでにそうなのである。すなわち、自然の情景によって示される曹植の不安は同時に、丁儀の不安でもあったはずだし、何者かに對する非難の氣持は、丁儀が抱いている氣持を代辯したものであったに違いない。それは、「贈徐幹」の前半において、曹植自身の見解を徐幹に提示しているのとは、區別されねばならない。そして、そうした態度

が、13 14句の典故の使用においても一貫しているのだ。つまりそこでは、もとになった故事――晉を訪問する途上の季札が徐君のもとに立ち寄ったとき、徐君は季札のもつ寶劍を欲しそうな素振りを見せた。季札は使者の任を果たしたうえで寶劍を與えるつもりで、そのまま晉に赴いた。しかし任を終えて歸ってくると、徐君はすでに死んでいた。季札は寶劍を徐君の墓の樹に懸けて去った。(『新序』「節士」)――を思い出せさえすれば、それによって作者が丁儀に、「たとえ何が起ころうと君に對する私の友情は變らない」ということを傳えようとしていることは、容易に理解できるのである。

「贈丁儀」は要するに、すでに共有しているものの確認というレベルにある作品であったと考えられる。それが目的とするのは、享受者(丁儀)との連帶感の確認ないし強化に他なるまい。そうすることによって、相手を慰め勵ます〈贈答詩〉なのだ。

ところでそうした享受者との連帶感の確認ないし強化とは、言うまでもなく、「思い出させる表現」であることを基本とする、集團的に受容される詩歌が果たしてきた機能でもあった。その意味でも「贈丁儀」は、從來からの集團的受容形態にある詩歌の延長としての側面をかなり色濃く留めた作品と言わざるをえないのである。

いま、「贈丁翼」―「贈丁儀」―「贈徐幹」と並べてみると、より分かり易いかもしれない。すなわち、「贈丁翼」は、ごく限られた少數の仲間が共有する認識や感情をうたう詩であった。それは享受者を嚴しく選別するという點では、集團的に受容される詩歌の中では特殊な部類に屬していた。そして、その方向に特殊化を推し進めていった先に、「贈丁儀」を位置付けることができるのである。當事者だけが共有する認識や感情をうたい、連帶感を確認强化するという點では、「贈丁翼」と「贈丁儀」は基本的に同じなのだ。だが兩者には違いもある。それは、「贈丁儀」では、もはや宴集の場が生みだす獨特の雰圍氣によりかかろうとはしておらず、かわりに常套を排した作者獨自の比興的表現や、作品に完結性をもたらす構成を追求することによって、言

語作品としての自立性を高めているという點である。それは「贈丁儀」が、大勢の前で讀みあげられる詩ではなくて、丁儀一人によって讀まれる（默讀される）詩であったことを窺わせる。その點において「贈丁儀」は「贈丁翼」を離れて、「贈徐幹」の域に大きく接近しているのである。

しかしそれにしても「贈丁儀」が、從來の「思い出させる表現」のレベルを超えていないのは確かである。集團で受容される詩歌にこそ要請されてきた「思い出させる表現」は、ある程度の修正を加えたうえで、個人として讀まれる〈贈答詩〉に應用することも、不可能ではなかったわけだ。

だが、そうした「贈丁儀」の行き方は、いずれは行き詰まらざるをえないのではないだろうか。なぜならそこでは、受容形態が變化したといっても實際は受容者の數が複數から單數に變ったというに過ぎず、確かにそれによって個人的な事柄をあつかえるようになったという面はあろうが、結局のところは、二人だけの閉ざされた世界における關係性の確認の繰り返し以上にはなりえず、作品はしだいに閉鎖性を強めていくしかないと考えられるからだ。

＊　＊　＊

われわれはようやく「贈徐幹」の畫期性を見透かせる地點にたどりついたようである。すなわち、すでに在るものを確認し強化するのが「思い出させる表現」であったのに對して、「贈徐幹」では、二人の間にすでに成立している關係性を基礎としつつも、その上にたって、未だ二人の間で共有されていないものを徐幹に提示しているのだ。「贈丁翼」「贈丁儀」は受け手との結び付きを確認し強化する〈贈答詩〉だったが、「贈徐幹」がもくろんでいるのは、徐幹との新しい結び付きの創造なのだ。しかも曹植は、それを完全なかたちでやりとげようとしている。つまり曹植は、相手に提示するものが、相手のできるだけ深いところで受けとめられることを企圖しているのだ。そのために曹植は、過去の傳統と眞正面から向きあい、それを充分に消化し、さらに大きく前進させることによって、彼自身の個性に彩られた確固たる作品世界を作りあげているのである。

そうした作品世界は、讀者（徐幹）にとっては、決して入

りこみ易いものではなかったであろう。獨特の典故の使用は、そのことを端的に示している。しかし、讀者が能動的な解讀行爲によって作品世界の扉をこじあけてその中に入れたなら、それ以前には存在していなかった、二人の間のより深いところでの疎通が實現するのである。「贈徐幹」の解讀は、したがって、創造的營みたらざるをえない。まさにそのことによって、贈答詩の陷りがちな閉鎖性が打破されたと思われるのである。

『論語』「陽貨篇」に見える、あの「(詩は)以て群す可し」という言葉は、それを發した本人がどう考えていたかはともかく、初期の詩歌の本質に觸れているという點で、「興・觀・怨」と同列には論じられない重要な意義をも有しているように思われる。それは單なる理論上の抽象的な議論に留まらない、初期の詩歌の實際に根ざした、きわめて具體性をもった發言としても理解できるからだ。

いかにも〈詩〉は、當初より、「群」を離れては成立しえなかった。たとえば、祭祀の場・儀禮の場・社交の場・遊戯の場などが、ただちに思い浮ぶ。古代においては〈詩〉は、そうした場において「以て群す可き」機能を果たすが故に、〈詩〉たりえたのだ。そして贈答詩においても、早い段階においては、「以て群す可き」機能——たとえば連帶感の確認強化——を擔わされていたことは、前稿および本稿の第一節で見たとおりである。

ところが建安後期になると、そうした初期的段階から脱却して「群」から離れた個人のための〈詩〉を模索する動きが、〈贈答詩〉というかたちをとって顯在化してくるのである。

だがそれは現代の人間が考えるほど簡單なことではなかったであろう。その點、後世にまで傳わりえた作品が、建安を代表する二人の詩人、曹植と劉楨のものに限られているのは理由のないことではない。何らかの明確な方法論がどうしても必要であったと思われるからだ。本稿の三章では、「贈徐幹」に焦點を當てて、曹植の選び採った方法について考えてみた。「贈徐幹」によって曹植は、從來には無かった新しい詩歌文學の世界に踏み込んだと思われる。

そこでの實踐はやがて「贈白馬王彪」に承け繼がれ、よりいっそう大きな成果を生みだすことになるであろう。

一方、謝靈運によって「偏人」（『辭源』によれば、「才行特出、與衆不同的人」）と評されている劉楨の〈贈答詩〉には、曹植のオーソドックスな行き方とは逆の、どちらかといえば過去の傳統に對する否定的な姿勢が窺えるように思われるのだが、それについての考察は、稿を改めねばならない。

（一九九〇年九月十九日）

〔注〕

(1) 建安詩のかなりの部分は樂府によって占められているが、建安年間後期の時點では、樂府はまだ基本的に、多數の人々の前でうたわれるために作られていたと考えてよかろう。一方、樂府以外の建安年間後期の作と判斷される詩についても、文人たちの宴集の場と距離をおいた私的な作品を捜すのはむしろ困難で、贈答詩をのぞくと、いわゆる雜詩の中にそれらしく感じられる例が若干みつかるぐらいである。雜詩の制作時期の確定はむつかしいが、一部の雜詩が贈答詩とともに建安詩の新しさを具現していることは間違いなく、そうした觀點に立っての雜詩の表現についての檢討は、今後の課題となろう。

(2) 公的な宴集の場と深いかかわりをもつと推測される作品としては、曹植「贈丁儀王粲」の他に、劉楨「贈五官中郎將四首」の中の「其一」と「其四」がある。しかし、「贈五官中郎將四首」については、それがはたして曹丕に贈る目的で作られた連作詩であったのかどうかということ自體に、大きな疑問が殘る。結論としては、鈴木修次氏が『漢魏詩の研究』（昭和四十二年・大修館書店）で說かれたように、其一～其四の四首は連續性をもった作品ではなかったと考えるべきであろう。しかも、「其二」と「其三」については、ごく親しい友人への贈答詩としての體裁を充分に備えているのだが（ただし、曹丕にあてたものとは考えられない）、「其一」と「其四」の方は、これといって贈答詩らしい表現は見あたらない。もし「贈五官中郎將」という詩題に信用がおけないのであれば、「其一」と「其四」は、もともとは公讌詩的作品であったものが、何らかの事情で贈答詩として傳えられたと理解するのが適當ではないだろうか。

なお、念のために付言すれば、公讌イコール公的な宴というのではない。五臣注を見ると、「濟曰、公讌者、臣下在公家侍宴也。」（曹植「公讌詩」注）・「銑曰、此侍曹操讌、時操未爲天子、故云公讌。」（王粲「公讌詩」注）とある。當時の公的な宴集を代表するのが公讌であった。

(3) 黃節『曹子建詩注』・古直『曹子建詩箋』參照。また、伊藤正文『岩波詩人選集3・曹植』（昭和三十三年十一月）・同

「曹植詩補注稿（詩之三）」（神戸大學文學部紀要12・昭和六十三年三月）參照。

(4) 「答二郭三首」の他に、次の作品がある。

應亨：「贈四王冠詩幷序」（王氏四兄弟に贈った詩。）

傅咸：「贈何劭王濟詩幷序」（何劭と王濟は作者の親類。詩は作者が都を去るに際して贈ったものと思われる。）

(5) 二作品は、次のとおり。

傅咸：「贈崔伏二郎詩」（送別の宴で、崔・伏二氏からの贈詩に答えたもの。）

陸機：「祖道畢雍孫劉邊仲潘正叔」

(6) 唐代においては、相手に直接手渡す場合は「贈答」、離れた相手に何らかの手段を介しておくる場合は「寄酬」と、明確に區別されており、その點で建安時代とは興味深い相違がある。このことについて、川合康三氏より注意をうながされた。

確かに建安詩人の贈答詩には、唐代なら「贈答」と「寄酬」とに分けられるべき作品が一括されており、唐代のような區分はまだ確立していない。より實體に卽して言うなら、ある特定の場で直接相手におくったと考えられる例が大多數を占めていて、離れた相手におくったと明らかに判斷される例は非常に少ない。（少數例のひとつに劉楨「贈徐幹」があり、それは「誰謂相去遠、隔此西掖垣」という、作者が徐幹と離れて居らなければならないことを歎く句からはじまっている。）だから、後世のような區分を立てる必要性は、未だ生じていなかったのであろう。贈答という呼稱がいつ頃から定着したのかという問題は殘るが、贈答詩を、「贈答」と「寄酬」とに言い分けるようになるのは、贈答詩の擴大發展の結果に他ならない。

が、それにしても、建安年間後期の贈答詩に、唐代の「寄酬」詩に相當する作品が、少數ではあるものの出現しているという事實は、重要だと思う。そのことについての考察は、今後の課題としたい。

(7) 伊藤正文「王粲詩論考」（中國文學報・第二十冊・一九六五年四月）

(8) 黃節『曹子建詩注』：「王粲從軍有苦樂詩、蓋作於還鄴以後。此詩言全國令名、亦在張魯既平、還鄴以後。非贈於粲在軍中時也。」

(9) 應瑒「侍五官中郎將建章臺集詩」とその他の建安詩人の公讌詩とをどう考えるかについては、興膳宏教授から貴重な御意見を頂戴した。

(10) 「贈丁翼」は、その情調からして、曹植の側近に對する肅清がはじまった建安年間末期の作と考えるべきであろう。

(11) 注(1)參照。

(12) 詩歌の作者が不特定の人々から特定の個人に變わっても、集團的受容という形態が變わらなければ、作品のあり方に根本的な變化を生ずるには至らないのではないか。受容形態の

變化が制作者の側の變化のあとを追うかたちで進行するのは、集團から個人へという全體の大きな流れにおいて、作品がどのように受容されるかということの方が、より本質的であったからだろう。あるいは、集團的に受容される詩歌の方が、それがうたわれる（讀みあげられる）場の雰圍氣といった言語以外の要素を利用できるということも、受容形態の變化が簡單には實現しなかった原因と考えられる。群を離れた個人によって鑑賞されることを前提とした詩歌の出現は、したがって、詩歌史がかなり高度な段階に到達したことを示しているとも言えよう。

(13) 余冠英『三曹詩選』（人民文學出版社・一九五六年八月。一九七九年十月第二版）

(14) 曹丕「與吳質書」：「而偉長獨懷文抱質、恬淡寡欲、有箕山之志、可謂彬彬君子者矣。」

『三國志』「王粲傳」注引『先賢行狀』：「（幹）輕官忽祿、不耽世榮。建安中、太祖特加旌命、以疾休息。後除上艾長、又以疾不行。」

(15) 『中論』序：「深美顏淵荀卿之行。故絕迹山谷、幽居研幾、用思深妙。以發疾痎、潛伏延年。會上公撥亂、王路始闢。遂力疾應命、從戍征行。歷載五六、疾稍沈篤、不堪王事。潛身窮巷、頤志保眞、淡泊無爲、惟存正道。……著中論之書二十篇。其所甄紀、邁君昔志、蓋千百之一也。文義未究、年四十八、建安二十三年春二月、遭厲疾大命殞頹。」

池田秀三氏は、『四庫提要』・周中孚『鄭堂讀書記』に據りつつ、「この序の撰者は不明であるが、內容より見て、曹操幕下の同僚で徐幹とかなり親交のあった者のようである」と言われる。（「徐幹中論校注（上）」、京都大學文學部研究紀要・第二十三・昭和五十九年三月）

(16) 朱緒曾は次のように言う。

「子建特勉以仕進。興文自成篇、指中論也。言貧賤著書、沈淪不仕、不知寶棄於地、是亦和氏之愆。喻偉長加旌命而不出、是畏刖而懷璞不獻也。」（黃節『曹子建詩注』引）

また、『三曹詩文賞析』（巴蜀書社・一九八八年十一月）での張少康氏の解釋、『古詩鑑賞辭典』（中國婦女出版社・一九八八年十二月）での韓濤氏の解釋は、朱說を踏襲している。

(17) 徐幹の卒年は、從來、建安二十二年とされてきたが、池田秀三氏は『中論』序によって脩正された。（前揭「徐幹中論校注（上）」解題）

(18) 『文心雕龍』「事類」：「陳思臺才之英也。報孔璋書云：『葛天氏之樂、千人唱、萬人和。聽者因以蔑韶夏矣。』此引事之謬也。按葛天之歌、唱和三人而已。相如上林云：『奏陶唐之舞、聽葛天之歌、千人唱、萬人和。』唱和千萬人、乃相如推之、然而濫侈葛天、推三成萬者、信賦忘書、致斯謬也。」

(19) 曹植「與楊德祖書」に、次のような記事がある。

「以孔璋之才、不閑於詞賦、而多自謂能與司馬長卿同風。譬畫虎不成、反爲狗也。前書嘲之、反作論盛道僕讚其文。」

曹植が書簡で、陳琳の自信過剰を嘲ったのに、陳琳の方では譽められたと勘ちがいして、周圍にそのことを吹聽したと言うのだが、そうした誤解が、獨特のひねった典故の使用法から生じた可能性は大きいと思う。